

政務活動費活動報告（視察）

(1) 出席者（会派名・個人名）

夢みらい・赤井康彦、安藤博、八木嘉之、辻真理子、小川喜三郎

(2) 実施日：7月23日（水）

【1. 調査の目的】

長島愛生園

国の隔離政策による現状の確認

【2. 調査地選定理由】

国立療養所 長島愛生園

【3. 調査結果】

国立療養所 長島愛生園

(1) 内容

まず、職員による全国13カ所の隔離施設や当時の園の現状の説明（約1時間）があり、差別と偏見では本人の長期にわたる身体拘束は同然であるが、らい病を出した家として、夜逃げ同然に住所を転々とされた。ほとんどの家族がどこで生活をされているのかは不明。収容された人たちもほぼ全員偽名であるとのこと。当時は有効な治療もなくアメリカでの「プロミン」の発見まで長い年月がかかった。現在は完治するとの説明。その後、現地フィールドワーク（約時間）では、収容桟橋、収容前の検閲所、監房等当時の施設の見学、神経の麻痺による手足の切断、その後は命を落とすという現実に向かい合った。職員不足による過酷な労働など、人権がないがしろにされていた。その後は、13歳で収容されたという80歳の三重県出身の方との懇談会が実施された。収容者との生の声が伺えた。

(2) 考察

現実起こった差別は裁判で明らかのように不当な隔離政策であったが単にそれだけで済まされるものではない。今も納骨堂にはほとんど引き取られなかった遺骨が祀られている。

ハンセン病の正しい理解は当然であるが、多くの差別に対し自ら確認し正しい判断力を培い、新たな差別を生まない社会の構築に積極的に努力をする覚悟である。